

■橋川文三 戦前の人物を正当に評価し直し、三島由紀夫を説得的に批判して、戦後日本の政治学政治思想史に不朽の足跡。
はしかわぶんそう
水平社結成・1922＝ 長崎県上県郡峰村(対馬)で、代々対馬の海産物や木炭などを広島まで運ぶ商いをしていた広島県の保険代理店橋川福一の長男に生まれる。名はぶんどうとも読む。

治安維持法・1925＝ 3歳：父親の故郷広島県安芸郡仁保村に一家で帰郷し、安芸郡海田町などで育つ。

満州事変・・1931＝ 9歳：

帝人疑獄事件1934＝12歳：青崎尋常小を卒業、

大政翼賛会・1940＝18歳：広島高師附属中学を卒業して上京、第一高等学校文科乙類に入学し、文芸部に所属。
日米開戦・・1941＝19歳：
・・・・・1942＝20歳：卒業し、東京帝国大学法学部入学。

敗戦・・・・1945＝23歳：在学中、勤労働員で、郷里の広島食糧事務所に長期出張。原爆投下直前に農林省の採用試験のため上京、被爆を逃れた。敗戦後に卒業。丸山真男のゼミで近代日本政治思想史の方法を学ぶが、その分析の方法も思想もまったく異なり、丸山のいわゆる正攻法とは異なった“野戦攻城”を信条とするようになる。

新憲法公布・1946＝24歳：{文化新聞}を編集後、
新憲法施行・1947＝25歳：日本共産党に入党するとともに、潮流社に就職し、雑誌{潮流}の編集に携る。
三大事件・・1949＝27歳：総選挙で共産党が躍進した前後に共産党に入党、’編集部員としてまともに働くには、党员とならずにはおられない空気が生じていた’と述べている。

朝鮮戦争始・1950＝28歳：弘文堂編集部に移転するとともに、法政大学講師になると、共産党とは疎遠になり、
独立回復・・1951＝29歳：結核を罹患して療養に入るとともに、党籍は自然消滅。
自衛隊発足・1954＝32歳：療養を終え、

インスタントメン・1958＝36歳：明治大学講師にもなり、
美智子妃・・1959＝37歳：わだつみ会常任理事。_自らの政治思想史的立場を示すように、{思想の科学}に「乃木伝説の思想」、
安保闘争・・1960＝38歳：*続いて「失われた怒り―神風連のことなど」を寄稿したのに続いて、第二次世界大戦中に青年の心を捉えるも戦後は黙殺されていた保田與重郎ら日本浪曼派の意味を問ひ直す、記念碑的傑作「日本浪曼派批判序説」を刊行して注目を浴び、作家三島由紀夫からは、精神史としての伝記の執筆を依頼され、以後、天皇制ファシズム批判と共に断罪されていた右翼や農本主義者らの思想の検証・再評価をおこなって行く。

全国総合計画1962＝40歳：弘文堂を辞めて、明治大学専任講師。竹内好らの{中国の会}にも参加。
TV宇宙中継始1963＝41歳：この年発表した論文_「明治政治思想史の一断面〜“地方”の擬制と実態をめぐって」では、柳田国男の学問論、民俗研究の方法論との対比から地方改良運動を批判、

東京リトル・ツキ 1964＝42歳：「歴史と体験 近代日本精神史覚書」、_「昭和の超国家主義者」を発表した「現代日本思想大系31 超国家主義」以下5冊を責任編集しながら、「夭折者の禁欲〜三島由紀夫について」、

大学紛争始・1965＝43歳：_明治大学助教授、
いざなぎ景気1966＝44歳：「現代日本文学館 第42(三島由紀夫)」に、「三島由紀夫伝」を執筆するが、
美濃部都知事1967＝45歳：「現代知識人の条件」、翌年にかけて編著「明治の栄光 日本の百年4, 7, 8」、
霞ヶ関ビル・ 1968＝46歳：「ナショナリズム―その神話と論理」。「近代日本政治思想の諸相」の“あとがき”に、’戦前の超国家主義時代の経験を、特殊日本的迷妄でなく、一般的な人間の事実としてとらえなおす’と記していることから、丸山とは明確に異なる認識であった。_三島が評論「文化防衛論」を発表すると、「美の論理と政治の論理〜三島由紀夫“文化防衛論”に触れて」を書いて、論争になり、

大阪万博・・1970＝48歳：清沢汎「暗黒日記」編・解説。教授。この年、_三島が陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地を訪れ、隊員の決起を促すも失敗して自決、戦前の問題を戦後に引きずったものとして大事件になり、最大の理解者司馬遼太郎は哀惜の念に満ちた論説を「毎日新聞」に寄稿していたりしているのに対し、それまで、その日本近代批判と“文化防衛論”について、最も説得的な批判を行ってきたにもかかわらず、正当に評価されることは無く、

石油ショック1973＝51歳：「橋川文三雑感集」の1 歴史と感情、2 歴史と思想、「順逆の思想―脱亜論以後」、
角栄金脈辞任1974＝52歳：「日本の名著29 藤田東湖」、
クアランゴール事件1975＝53歳：「時代と予見 橋川文三対談・講演集」。「近代日本思想大系21 大川周明集」編、明治大学教授になり、
田中角栄逮捕1976＝54歳：「(評論集)政治と文学の境界」「黄禍物語」、
JALハイジャック・1977＝55歳：随想・随筆集「標的周辺」、4年前の後藤総一郎編の柳田国男の_「柳田国男―その人間と思想」の独立刊行、
成田衝突・・1978＝56歳：「近代日本思想大系36 昭和思想集Ⅱ」編、「歴史と精神 橋川文三対談集」。「欧米に出張し、プリンス頓大学客員教授も務めて、

革新大敗北・1979＝57歳：_帰国後も、
・・・・・1981＝59歳：_「西郷隆盛紀行」、
中曽根内閣・1982＝60歳：カール・シュミット「政治的ロマン主義」訳・解説、「岡倉天心 人と思想」編纂など、政治闘争において敗北した英雄や、急速な近代化の本流に取り残された敗者の、学問的には論じにくい人物や思想について、ライフワークのように、暖かいまなざしと文学的センスをもって書き続けたが、

デイズ・ニューラント 1983＝61歳：岡倉天心「日本の覚醒」訳。横浜市の自宅で、_脳梗塞により、現職のまま、没した。
没後、「橋川文三雑感集」の3 歴史と人間が出版され全3巻が完結、その後も、著書だけでなく、多くの人物によって、橋川文三についての研究や評価が書かれているが、「日本浪曼派批判序説」の作者としての評価の域を脱していないのは、扱った対象が広すぎたことが原因なのは当然なのは当然としても、サイデンステッカーが“丸山教団の法皇”と評した丸山真男の、不当とも思える低い橋川評価が影響しているとみられる。実際、丸山は、没後の回想で、橋川は‘現実政治についてのセンスや興味が無く、政治学者とか政治思想史の専門研究者’と思っている人はおらず、社会の現実そのものに対する直観力はゼロに近い’とまで酷評している。政治を離れれば、国文学者の高橋新太郎は‘自裁に至る三島由紀夫の行蔵を過不足なく後世に伝え得る情理と識見と文体の持ち主は、橋川を置いてほかにないように思われる’とまで述べているのである。